

洋畫問答

（黒田清輝（答）
太陽記者（問））

記者一日黒田清輝畫伯を、その平河町の邸に訪ふて、いろく油繪の事に就て、問答を試みた、その速記は乃ちこれである、其時同行の速記者は岩崎長治氏、黒田畫伯は男爵黒田清綱翁の長子で、佛蘭西には十年近くも居て、繪の修行をしたお方であつて、油繪といふものに就ては、尤も新らしい學問をしたのである、日本に歸つてから、同志と共に白馬會といふを起し、今年の秋は上野にその繪の陳列場を設けて、滿都の喝采を博した、記者の畫伯を訪ふた日は、畫伯が多くの橐駝師を指揮して、庭造りに餘念無き時であつたが、快く記者をその畫室に引いて、興あり氣に談された、（問）とは予の問である。

乙 羽 生 識

（問） 一牀新派と舊派と云ふのはどう云ふ點からあゝ云ふ名稱が出来たのですか

（答） 名稱の出来た原因は能くは知らぬですけれども、新聞杯で色々に書き出してからあゝ云ふ名になつて仕舞つたのだらうと思ひます、つまり繪の上から自然區別があるからです

（問） 繪の上の區別と云ふのはどう云ふのですか

（答） 新派と名付けられた人と舊派と名付けられた人の書き工合です、それが自然違つて居つた、目の着け所が違ふ、繪の上で以て随分其二つの派は大別して居ると言つて宜い位になつた、それから自然あゝ名が付いて今の所では全く違つたものと人も思ふ様になつて仕舞つたです

（問） 違つて居る點ですね、どう云ふ所が舊派で黒いとか白いとか云ふことがあるのですか

(答) 色の黒いと云ふのと明かると云ふのはちよつと見ても知れる、それは何故かと云ふと、先づ繪書きの使ふ繪の具が違ひ、切れも違ふ場合がある、本當の新派と云ふ方の特色の奴を書かうとした時には油を吸ひ込む切れを使ふ、舊派と云ふ方で書いた奴は總べて黒い影がある、ビチューム色は舊派の色と云ていゝ位ですさう云ふ工合に違が出来て来るのは目の着け所が違ふからの事です

(問) 舊派です、ね、舊派なるものゝ繪は昔で云ふとどう云ふ所になつて居るですか

(答) 繪の具の上から云へば昔の人は皆舊派なんですが目の付けどころから云へば今云ふ新派の狙つて居る點を甘くやつてのけた人も無いではない全株新派だとか舊派だとか云ふいゝかげんな名に就てお話をしはじめましたが私の云ふ舊派と云ふのは重に日本で今迄かいて居た油畫と云ふ意味で新派と云ふのは西洋で此頃やつて居る明るい畫一般の事でアンプレツシヨニスム丈の事ぢやありませんから其積で聞て下さい

(問) 新派なるものはいつ時代から起つて來たもので誰か創設したものですか

(答) さ様畫を明かるく書くと云ふ事に爲つたのは極く近頃のことなので、此の十九世紀の中頃即ち佛國にてミレだとルーソーだとか云ふ時代の繪と云ふものはまだ今日のやうに明かるといふ繪ではなかつた、併しミレ時代の畫は世紀の始めの頃の繪に較ぶれば非常に變つて來たもので、其變化はどういふ工合かと言へば目の付け處が新らしく爲つたのです、實地の事や天然のものに就て研究するのです人情風俗のチヨットゑた節をゑつかり押へてかく事を仕始めた、それまでの趣向と云ふものはさうでなくて只工夫をして繪書き部屋の中でク子つてものを拵けて仕舞つた、だから線や位置は一通り甘く行て居ても感ずるものは前の時代には鮮い其處でミレだ

とか又景色の繪書きで名高く云ふコロ^ーと云ふやうな人の繪は感じの方から以て來た繪なんで、即ち考へ丈は新派です、併し色と云ふ側^{がら}から言へば今日のやうに明かるい色はなかつた、其後に段々明かるくなつた、今日では極端まで進んで明かる過ぎるものもある、兎に角世上では大抵明るい畫がいゝと云ふ工合になつて來て居るです、日本では私なんかゞ西洋から歸つて來て始めて新派だとか云ふものが出來た、夫れは私達の繪が明かるいから前から日本に輸入されて居た畫の風にくらべて見ると随分違ふので、これでも油畫かと驚く人も有れば又た明るい畫は日本の今の時勢には適しないなど云ふ人も見へたかれこれどうく人の交際^{つきあひ}の上からも何だか可笑しな調子になつて來た所もあつた、それで今度は交際の側からのことを重^まりに人か氣を付け始めた、さうして舊派と言ひ新派と云ふ奴は權力の争ひ社會上の位置の喧嘩の結果だと言ふまでに及んだ實の處は交際上の喧嘩は世間で云ふ程一向立派でないのです、併し繪と云ふ側から全躰非常な違ひがあるから二つに別れるのも無理はないです歐羅巴はさて置き日本でも此頃は随分明かるい繪を書く人が多くなつた、何故明かるい繪を書くことが流行^{はや}るやうになつて來たかと言へば前に言つた感じの方を書く^と云ふ方で、只ものゝ形を書く^と云ふ丈けでないからですこれが時勢と云ふものでなよう

(問) 舊派は先づ色が變つて居なくてもミレヤコロ^ーの繪の工合と違ふと思ひますが……

(答) 御尤ですミレヤコロ^ーは考の上からは全く新派です

(問) 新派と舊派の稽古の仕方とかき方とは何も違ひはないですか

(答) 西洋では黒い畫をかく人も明るい畫をかく人も稽古の仕方に違ひはない畫の學校も立派なのが澤山有つて

一般に裸躰の人間を手本にして稽古するので線の強い弱い、隈取りのかたいやわらかい、それから色の出し方などでも裸躰に付て話を聞くのが一番分り易い又教へる側でも説明がしやすい日本では本式に稽古する處は今までは一つも無かつた本式の稽古でないのですからクロモ石版や何かを手本にしてそれを寫してまづ一寸云はゞ筆の使ひ方を覺へる木の葉はこうかくもの雲はこうかくものと云ふ形を知るこの覺へた形が癖に爲つて自然のものに向つてさてかくとなると先づ自分の御手本にした畫が目の先に出て來てそれから其手本の筆法でやらかすこう云ふのが舊派の稽古の仕方と舊派のかき方だと考えられます夕日なら夕日の半分山の後ろに陰れて光線を僅かに餘して木の上の方がチヨイ／＼明かるくなつて居ると云ふやうな所ですね、さう云ふ場合を寫してどう云ふ天氣具合の時のどの位日が入りかゝつた時と云ふのを書くのが之が新派なんで、それが又さうでなくつて安藝の宮島とかそれから天の橋立とか云ふ名高い景色を似た様に習た様に書くのが舊派です、景色なら景色の形を記するのが舊派、新派と云ふ方は先づ其景色を見て起る感じを書く、或る景色を見る時には雨は降る時もあり天氣の極く宜い時もあり色々ある、其變化を寫すのです、總べての繪が其通りで、人間の顔色でも色合ひでも皆さう云ふ所を寫す、先づ色合ひで言へばですね、人の顔と云ふものは頬の處が桃色のやうに紅くして唇も紅くして居る、額や鼻の先き杯は白茶けて居る、さう云ふ規則に依つて其通り書き上げて仕舞ふのが舊派なんです、又其人の面の内で一番明かるくなつて居なければならぬ筈の鼻の頭の所が黒くなつて居る、それから耳の端が眞赤にして居ると云やうな所を書くのが新派なんで、それは大變奇を好んだやうで可笑しい、併し奇を好んでやつた譯ではない、さう云ふ空氣の中に或る特別の場合があつて其處の處のチヨツとした感じを寫した、

同じ人の顔に就ても光線を前から受けたのと後から受けたのと外とに置いた時と内に置いた時とは大變色の工合が違ふ、其奴其區別をしないで同じやうに只顔なら顔と云ふ様に見へる丈に書くのが舊派、外とに置いた奴は外とに置いた通りに頭の髪の上にも蒼い空の反射があつて脇にあつた花や草の反射が鼻の下や唇の脇に付いたりする、ことによると、半面眞赤で半面眞黄色な場合も有るそれを遠慮なくかけば新派です、それでミレだとか何だとか云ふ時代の繪は今の新派がやる程の色の研究をしたのは鮮いですが日本の舊派と云ふ人達のやる様な變化の無いものぢやなかつた已に夕立だとか虹だとか云ふ様な節を自在にやつてのけたそれだから私がミレなどは考の上から新派だと云たのです色の變化に就て研究する事は其後に始まつたミレ時代にはまださう云ふ細まかな所まで立至らなかつたのです、今の時代がミレ時代より一歩進で一つのものに就ても其色の變化に人が目をつける私などもそう云ふ空氣の中に育つたもんですから只物の形をかくと云ふ丈ぢや氣がすまない其處で色々研究してかいて見せると、此方の人の目に慣れないものだから善し悪しは兎に角、顔と云ふものは白いものだと思つて居つた所が青く書いてあつたり髪の毛が黒いものだと思つて居ると黄く書いてある、さうすると随分攻撃される、それは攻撃されやうがされまいが新派の特色なので、さふ云ふ變化をやるのです、それだから寫眞などを見てやるなどと云ふ様な事は一切やらない一つの規則と云ふもの、たとへば影は黒くすべきもの日向は白くすべきものと云ふやうなことを私なんかは大に嫌います規則的の畫は今日の時勢に適しない、日本の油繪は未だ時勢に適するなんと云ふ程の事はないですけども佛蘭西などでは黒い奴はもうだめです

(問) それで私杯の考では舊派のやうに眞黒いものはどうしても陰鬱な、明かるいものは陽氣なもので、日本の

人情には新派の方は後來盛んになつて行くだらうと思ふです、新派と云ふものは或る一つの學問、理化學と云ふやうな色の配合だとか空氣の工合だとか云ふものを巧みに應用するのが新派の主眼であるですか、

(答) それはシアンスを幾分か應用すると云ふものではない解剖學や遠近法などは無論知つて居なければならぬそれから繪具などについても一と通り此色と此色と混ぜると何う云ふ作用を起すとか、變化しないと云ふ變化するとか云ふこと位は誰れも研究するのです、色の配合や空氣の具合などを甘くやるのには別にシアンスを應用するなど大げさに云ふ程の事は決して有りません先づ云はゞ一つの畫について其畫の色の釣合などを見るのにはいくらシアンスの力が有つてもだめです、其處が繪かきの頭がなければならぬ處です

(問) それで書くのですねへ、生徒が舊派なり新派なり學んで一通り出來ると云ふ域に進むには何方が早く行きますか

(答) さうです、一年か二年習つた時位までは舊派と云ふ側の方が大變調子が宜いだらうと思ふです、同じ繪を習ふのでも手本を借りてそれに依つて書くを始めから物になつたやうなものが出來る併し私杯のやる方法で行けば石膏だの裸躰に依つて書かせるものだから一年や二年書いたつて書いて出來たもので一面の畫の形が成したものはチヨット少い、其形を成したものが出來ないと云ふのは其處が新派の得意な處で始めつから畫をこしらへる事は無用です、只物を見る目の寸法を拵へる、其内に手は獨りで慣れて來るそれで先づ目の寸法と云ふ側をしつかり固めて置いてそれから油繪をやらせる時には人の形はスツカリ書けると云ふ工合にさせるのである、舊派の稽古の仕方に依て出來た畫を見れば三四年書いた位では大變結果が宜いやうです、風景でも何でも書け

ると云ふやうなことになる、それだからチヨツトした繪書きになるには其方が大變宜からうと思ふ、併し此の方は速成法ではあるですけども本當に立派に仕上る道では無論ない、或る時私が或る人に規則的の教授を受けた事マツが有りました裸躰の畫の稽古を始めてから四年目計の時でしたが或る學校に新に這入つてかいて居ましたら教師がやつて來た、さうして私の畫を見て大變褒めた、其先生褒める癖がある、無暗に褒める、私の書いたのを見て褒めた、私の教師杯はちつとも褒めぬ、悪くはないと言へば非常に褒めたのである、所か其先生は始めから大變宜いと言つた、妙なことを云ふ人だと思つて一通り言はせて聽て居つた所か、其人が云ふには繪を書くのはお前さんの様にやつても大變宜いけれども影日向を一時に書いて行くことはしない方が宜い、影の所は何でも宜いから一通り黒い色で塗つて置いてそれから日向を書いて行くが宜いと言つた、私はそれつきりで其處の學校には行かなかつた、大變私杯のやる方法とは違つて居る、私杯のやり方は影でも日向でも自分が是れだと思つた調子の色を以てちやんと其度合に適した場處に持つて行つて置けばもうそれで澤山だ復たと動かすことはない、さう云ふ方法で習つて居るのに一つの規則に入れやうとした、地と云ふものを兎に角塗つて置いてそれから片一方の明かるい方からぼち／＼塗つて行けば書き易い方法なんで、それは書生が或る度合ひまで進むには大變仕易い、豫じめ黒っぽい色で何の色でも構はぬピチュームピチュームの様な便宜な色で塗つて置いてさうして明かるい所を付けると忽ちものが浮て見える、其方法を語り教へたのです、舊派と云ふ側の習ひ工合は語りそれなんです、さう云ふやうな方法で習ふ、私なんか習ふたのはさう云ふ方法は何にも習はぬ、自然と首、つ、引き、でそれだから大變始めは這入り悪い、けれども研究すると云ふ側から行くと大變面白いのです、何も規則が無いのだか

ら面白い、手にも目にもくせが付かない自由にに發達する事が出来る、今日本で云ふ舊派と云ふ人達の習つた方法はどうしてやつたか私は知らぬですけれども、先づ舊派と世間で呼ぶ人の書いた繪に據つて見れば大抵其の方法は見ぬる、空を書いても又木を書いても同じやうな色や形で以て出来上つて居るです、空にしても先づ下地として蒼い色を塗りそれに白い色や鼠色のやうな卵色のやうな色をぬりつけて雲とすると云ふやうにやつて居る、果して朝の色だか晝の色だか晩の色だか雨降る時だか日のあたつて居る時だか能く分らぬです、それは全く一の規則に據つて行くからの事で一寸畫らしいものをこしらへる様に爲るには至極いゝです、がそう云ふくせがついて仕舞へば何某と云ふ一人前の者に爲るのは難いですからいそげば廻はれて始めつから規模を大きくどんな型に接しても人間を並べるなどには差支ないと云ふやうに、物の形を書かうと云ふには確つかり固めて掛らぬと往かぬです、本當の繪書きにならうと思へば私なんかの方法が宜いかも知らぬと思ふです、其代りに私なんかのやり方では二三年やつた位のことぢや繪書きだか何だかさつぱり分りやしない、それと變つて規則に依る方では二三年もやれば木だの山だの書けるように爲つて石版の下畫や新聞のさし畫位は出来るでせう

(問) それではあちら杯では石膏杯は十分あるだらうと思ふ、裸躰でもモデル杯と云ふ方法を以てやるですか

(答) それは非常に澤山ある、月曜日の日がモデルを代へる日である、一週間毎に代へる、大きな學校と小さな學校とは違ふですけれども一通りの學校でも月曜の朝は色々な男や女が一四五人位は来る、手本の御用はございませぬかと云ふ譯なんです、之れを一人々々裸躰にして見ていゝのを雇ます、餘り宜い奴が澤山来た時には週間を極めて置いて何月の何番目の週間は誰、其次の週間は誰と書付けて留めて置く様にするのです

(問) どう云ふ種類の人がモデルに爲りますか

(答) モデルと云ふものゝ種類は色々あるですけれどもマア重もな奴は伊太利人で親子兄弟詰り先祖代々と言つて宜い位で、モデルを商賣にして居る中でも女は目に付きやすい着物の風が丸で普通の風とは違つて居ます袖の短かい白いシャツ見たやうなもので着て頭を色々な色のハンケチの様なもので包んで居る、ナール邊の風俗だと云ふことです、一寸繪書きの氣に入る姿ですさう云ふ様子をして居る者は大抵親子兄弟皆モデルです、

(問) モデルを仕ふのはどの位な價額で雇ふのですか

(答) 普通の直段は女が半日ですなへ、詰り晝の一時から五時迄とか、朝にすれば八時から十二時迄とか、女の方は佛蘭西の金で五フランです、詰り一弗です、男の方は四フラン、少し廉いのである、伊太利人の中には今少し安いのも居ます

(問) 美醜は論じないですか

(答) モデルだから必ず美だと云ふ事はないそれだから大勢集めて其中から選ぶと云ふ必要があるので十分宜いのは宜い人の所を計廻はつて歩く、それでも報酬は大抵變らぬ、併し取扱ひは自ら違つて来る時々着物でも買つて遣るとか、飯なんかも一緒に食ふとか云事に爲る又モデルを妾のやうにして居る人もある、それだから上等のモデルは着物も餘程立派なものを被て居る、そんな上等なのは學校なんかには決して來ません